様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 １８ 日現在

機関番号：１４５０１
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2014～2017
課題番号：２６５９０２１３

研究課題名（和文）キャンパス内の国際的人材育成プログラムの効果の検証と卒業生の活用に関する研究

研究課題名（英文）The effects of international education programs on campus, and collaboration with graduate students

研究代表者
河合　成雄（KAWAI, Naruo）

神戸大学・国際教育総合センター・教授

研究者番号：６０２９４２４５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、日本人学生に対してキャンパス内の国際的人材育成プログラムの効果を検証するという前半部分と、そこでの卒業生の活用の新しい在り方を探るという後半部分とからなる。具体的には20年以上にわたって実施されている「神戸大学国際学生交流シンポジウム」を材料に使い、かつての経験者へのインタビューを主に行った。長いスパンでみる調査は、短期のものとは異なり、人材育成の面やプログラムの評価の点で相違が称することもわかった。
卒業生の活用は、人材育成の方法として新しい試みであったと言えよう。卒業生は現役学生のロールモデルとなり得たり、教員と学生の間でファシリテーターとして寄与したりすること等が確認された。

研究成果の概要（英文）：It is widely understood that international education programs on campus between international and domestic students are very effective. However we need to clarify the effects using various evaluation tools.
The first part of this research used mainly interviews with graduate students, who have experienced the "Kobe University International Students' Symposium (KISS)" which has been held every year from 1995. I also implemented questionnaires to former participants. The second part of this research looked at how collaboration with graduate students can increase the effectiveness of KISS. I found that they can contribute to the implementation of the program in many ways.

研究分野：異文化間教育

キーワード：国際教育　人材育成　卒業生の活用　気づき　評価　事前教育　卒業生の教育

１．研究開始当初の背景

本研究は、大学のキャンパス内での国際化教育に焦点をあてたものである。そういった意味では、本研究は、EAIE (European Association of International Education)での B Nilsson らが主張するように、交換留学プログラム等で国外に出ない学生に対して国際化教育をすること(Internationalisation at Home)の重要性が確認されるようになってきている流れに沿うものであった。他方では、ヨーロッパでは、学内において「文化の多様性がもたらすインパクト(M.Otten)」のような研究が見られていた。国内においては、国際交流プログラムの報告書はもちろん、研究レベルでも国際交流を扱ったものは多くあるが、人材育成の点から卒業後も見て研究したものは見あたらなかったのであり、その点で萌芽的な段階の研究と言えた。報告者においても「キャンパスにおける交流プログラムが日本人学生に与えるインパクト」『神戸大学留学生センター紀要』10 号 pp.85-104、2004 年において、キャンパス内での国際化教育の効果の検証を試みたこともあるが、卒業生にまで焦点をあてる研究は初めてであった。本研究のきっかけとなったのは、海外留学の場合でも、その意義や目的を本当に理解するのは、ある意味で卒業後の社会人になってからではないかと、報告者の日々の海外留学相談や卒業生との関わりから感じるようになったことである。

以上のようなきっかけをもとに、実際に実施している国際教育プログラムそのものを評価したり、そこに参加する学生への教育的効果を評価したりすることが、学内の国際交流プログラムの有効性の検証に欠かせないと思われた。またその一方で、卒業生（社会人）を巻き込んだ教育プログラムの開発を試みることは国際教育だけでなくキャンパス全体でまだまだ非常に珍しく、それは報告者の大学に限らないことであったと思われる。

２．研究の目的

本研究は、大学のキャンパス内での国際化教育に焦点をあてたものである。とりわけ日本人学生の国際的な能力を養成する人材育成に焦点をあてている。報告者は、日々、日本人学生の海外留学の相談、および留学生の教育に携わってきたのであるが、学生時代に海外留学も含め国際教育のプログラムを経験した日本人が、卒業後の人生にどのようにその体験を生かしているのかを明らかにするために、とりわけ学内の国際教育プログラムの経験者をまず調査することにした。さらにはそのような経験を持つ卒業生を活用しつつ現在の学生を教育するプログラムを作りあげるためのモデルを示すことが本研究の最終的な目的であった。

そのためには、国際教育プログラムそのものの評価や指標をある程度確立しなければならない。国という枠を超えた人材育成を行うために、まずどのような能力が必要とされ、さらには、いかなる教育が必要かつ有効であるのかを意識しながら、まずは学生時代に国際化教育を受けた卒業生に対してどのような教育がとりわけ有効であったのか国際化プログラムに限定して調査する。すなわち、国際的な人材育成に関して、卒業後にどのような能力が必要とされ、それが大学時代に受けた国際教育とどのように関連するのか、あるいは、どのような教育があるべきであったかを明らかにする。また、その場合、日本における国内学生の教育は、外国で考えられている国際的な人材育成とどのような点が異なるのか明らかにする。

卒業生を活用した現在の学生の教育については、授業やイベントそのものでどのように効果をあげることができるのか、また国際プログラムの事前教育や事後教育において、どのような形で卒業生に参加してもらうのが効果的であるのかを明らかにする。

３．研究の方法

本研究の研究者の所属する大学では、国際的な人材育成のためのプログラムとして、日本人学生と留学生による 1 泊 2 日の 日英バイリンガルの討論「国際学生交流シンポジウム」を毎年実施してきた。その即効的な効果については、検証を試みたことがあるが、今回は卒業者に対しての追跡調査という視点から、かつての参加者に対しアンケートとインタビューを実施することによって、長期の中で学生時代の教育がどのような意味を持ち得るのかさらに検証した。上記シンポジウムの約 20 回分の参加者は、のべ 1000 名弱であり、その半数が日本人学生であったが、その日本人参加者に絞ってアンケートを実施回収した。またそのシンポジウムには、毎年長期間にわたっての学生の準備委員会があり、日英バイリンガルでシンポジウムの準備から報告書づくりまで行ってきたが、それらの中心的メンバーにインタビューを行った。それぞれの実施年度において一貫してアンケートを行ってきたものがあるので、今回も同様な質問事項によるデータをとった。たとえば、シンポジウムの「参加目的」や、「何が得られたか」等という質問事項について、参加当時に行った質問と同じものを問うことによって、当時からどのように意識変化があるか、また、今振り返ってみて、現在の参加者に対してどのようなことを要求してみたいのか等について検討した。

さらには、国を超えた人材育成という視点から、シンポジウム参加当時と比較して、現在の「外国語能力」「海外経験」「外国籍の友人の数」などについてのアンケートも行った。その後、世代やジェンダーのバランスを考えながらインタビューを進めていった。2004

年の調査においては、これらの項目については実効性が大きいという結果が出ていたのであるが、今回はより長期的にわたり、卒業後の年数が大きい場合にどのようなことが言えるのかその有効性を検証してみた。

研究の後半部分である「卒業生の活用」についてであるが、初年度の平成 26 年には、試行的に上記シンポジウムのかつての参加者である卒業生と在学生がともに行うセッションを企画し卒業生が何を在学生にもたらすことができるか予備的に調査した。上記シンポジウムにおいて実際に分科会のディスカッションに入ったとき、および自由時間での交流の観察、およびそれらについてのインタビューを実施した。また、事後にシンポジウムを振り返る卒業生によるセミナーも実施した。続く 27 年度、28 年度には、さらにシンポジウム全体において、卒業生がどのくらいロールプレイと成り得るか短いプレゼンタテーションを入れるなどやり方を改善した。

当初は、平成 28 年度に調査を終える予定であったが、卒業生を活用したプログラムとしては、シンポジウム当日や、その直後の座談会などにとどまっていたので、事前研修について卒業生を活用することについてもデータを得るべく 1 年延長して研究を進めた。29 年度には、シンポジウムのテーマを決めたり、それぞれの実行委員が役割を決めたりする段階で卒業生を活用してみた。

４．研究成果

成果については、①キャンパス内での国際的人材育成プログラムの有効性、②卒業生を活用した教育、③今後の課題と研究の方向性、についての 3 点に分けて報告する。

①キャンパス内での国際的人材育成プログラムの有効性について

i)　「国際学生交流シンポジウム Kobe University International Students' Symposium (KISS)」でのアンケートの結果からは、本研究の 10 年前(2004 年)に実施した調査と同じような面としては、まず「気づき」と「インパクト」の強さがあげられる。多様な留学生に接することによって、異文化理解のきっかけになったり、深まったりするだけでなく、以後の行動に随時影響を与えたという回答が多かった。また、アンケートやインタビューから明らかになったことの中には、通常の授業とは異なる学外での一泊二日のシンポジウムという形態がもたらす効果がある。つまり、より全人的に接することの意味あいをあげる回答が多くみられ、国際教育のプログラムを組むにあたって、通常のキャンパス内のつながりと異なる面をうまく入れることの重要性が改めて認識された。

ii)　英語力や他言語の語学力の伸び、あるいは語学への関心は 10 年前に比べてみると、国際的な関心との相関性があまり強く見られなかった。インタビューでフォローしたところ、語学力はもともとツールとして早めに入学時あるいはそれ以前から携わっていることをあげる学生や卒業生がいた。語学力や英語力についても、以前は国際教育プログラムが大きなきっかけになっていたが、ある意味では、学生の意識が 10 年単位ぐらいでみれば進んできており、それにともない英語等の語学力ももともと参加以前から身についてきていると思われる。

iii)　近年上記シンポジウムにおいてルーブリック評価などを導入し、学生自身が国際教育において、それぞれ自身が自己評価している。"Can do statement" による、自己到達度を考えて国際教育プログラムを作成して面がもともと強かったのであるがより客観的な指標を得ることにより、個々の学生の評価、およびプログラムそのものの評価も新たな面から可能になってきている。そのことが、ルーブリック導入以前の学生をインタビューすることにより明確になったと言える。

iv)　インタビューにおいて、「気づき」からどのように進むか、あるいは進んでいったかをさらに問うたことがあったが、日本人の一つの傾向として、様々な文化や習慣に対してどんどん広く気づく方向に進む人は多いが、「気づき」から、「反省」や「行動」に移し、さらにもう一巡深めてそのサイクルを実施するという姿勢を意識することが卒業生であっても現在の学生であっても非常に重要なことではないかというヒントが得られた。

v)　それと関連することではあるが、ルーブリックによる評価を知った卒業生が、参加当時を振り返り、異文化等への「気づき」から先に進むべき道をもう少し理解していればという意見が多くあった。「きっかけ」としてのプログラムが、その後の自己の成長や意識の変化について、改めて振り返る行為が、現在の学生の教育ではなく、卒業生のためにもなっていることが一つの副産物であった。

vi)　国際教育の追跡調査の課題であろうが、前回の 10 年前の調査で、短いスパンでは証明し得たように思われたことが長いスパンでは必ずしもアンケート上の数字やインタビューにも表れず、証明が難しいことがわかってきた。また、「現在は国際交流に関することを全然やってないので」という理由でそもそもインタビューに応じない卒業生も 2 割ぐらいいた。これはデータを取る点で偏りが出る危険性を示しており、今後の研究の課題であると言える。

② 卒業生を活用した教育について

i) 卒業生は教員と学生の間に入ってファシリテーターとして果たす役割が大きい。例え

ば、教員が学生に直接教えたときに学生が頭で理解はしてはいても、それが深まったり、定着したりするためには、ファシリテーターとしての卒業生の存在が非常に大きかった。その意味では、事前・事後学習を問わず、また、上記シンポジウムの中のセッションであれ、ファシリテーターとしての役割は期待できるし、今後のプログラムにおいて多いに活用するべきであると言える。

ii) 卒業生はロールモデルになりえることがわかっただけでなく、学生により身近な存在としての意義があることも明らかになった。国際教育プログラムの体験の先にあるものなり、得るものなりが現在の学生にとって、より具体的に見え、また、かつての経験者の社会人としての姿が身近な手の届く一つの目標となりえる存在であることが明らかになった。

iii) シンポジウム等の当日での卒業生の活用と、事前研修での場合とでは、かなり意味合が異なった。国際教育プログラムを実施していくうえで、年度ごとのできの良し悪しをなくすためにも、短いスパンでの経験者からのアドバイスだけでなく、ある程度長いスパンをおいた卒業生からのアドバイスは非常に有効であることが、学生たちに対するアンケートから知られた。

③ 今後の課題と研究の方向性について

卒業生そのものを活用するだけでなく、学生の教育を卒業後まで見据えて、卒業してからもフォローするような教育体制があってもよいであろうし、そのようなパイロットプログラムを立ち上げてみる価値がある。卒業生は当然すでに教育を終えたものである言えるのであるが、現在の学生とともに学びなおす機会を大学が提供することは特に卒業して間もない社会人にとっては意味のあることがインタビューによって明らかになった。

卒業生のうち、卒業から5年以上経過している世代の人たちは、学生の時に、より客観的に自己評価する方法を持たなかったことがあり、現在の学生がルーブリックを使っているのに非常に興味を示した。すなわち、当時の自分の体験した国際教育も、現在に及ぶ影響も、ともにルーブリックを用いて振り返ることによって非常に明確な自己評価を得ることができたのである。さらには、自己の国際経験についてマップを描いてみせた卒業生がいて、それ以後、研究の最終年度に他の卒業生にも同様のことをしてもらったが、これは卒業生にとって非常に意味のあることであることが判明し、今後、同様の調査を大々的にすることが有効であるとわかった。また有効になるだけではなく、卒業生の教育そのものを視野に入れていくことができるという感触を得た。その意味においては、ルーブリックだけでなく、このマップを描いてもらうということは研究に値すると考えられる。

最後に、少し本研究とは方向が少し異なるともいえるのだが、卒業生という社会人を用いてできることは、地域の社会人や一般の人々との交流においても応用が利くことがわかった。例えば、現在、学生の宿舎・交流会館を中心とした活動として、オフキャンパスでの教育を目指しているのであるが、上記国際交流プログラムのようにいわゆる一般的な授業とは異なる教育は、そのような場面で多いにヒントになり、結びつきつつある。(2018　河合他)

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　１件）

① 川上尚恵、朴鍾祐、森田耕平、<u>河合成雄</u>、地域における留学生教育と国際交流の活性化に向けた神戸大学の取り組み、『神戸大学留学生教育研究』、第 2 巻、2018、53-78

〔学会発表〕（計　２件）

① <u>KAWAI Naruo</u>, KURODA Chiharu, HARRISON Richard, *Enhancing Internationalisation on campus: a case study at Kobe University,* Asian Pacific Association for International Education, 2016 年 3 月 2 日、メルボルン（オーストラリア）

② <u>河合成雄</u>、「神戸大学学生交流シンポジウム 20 年の歩み」、神戸大学留学生センターコロッキアム、2015 年 1 月 30 日、神戸大学百年記念館（兵庫県・神戸市）

〔図書〕（計　０件）

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
河合　成雄（KAWAI，Naruo）
神戸大学・国際教育総合センター・教授
研究者番号：６０２９４２４５

(2)研究分担者
(　　)

研究者番号：

(3)連携研究者
(　　)

研究者番号：

(4)研究協力者

（　　）